

まちにいる・まちにひらく 郡上八幡 saoco lab. の120日

佐々木 葉

フェロー会員 早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1, E-mail:yoh@waseda.jp)

四半世紀にわたり関わってきた岐阜県郡上八幡に、縁がつながりサテライト研究室を持つこととなった。まちに場所をつくり、まちにひらく試みのなかで出会った、まちの人々のふるまいや3時点まちなみ絵巻として展示した連続ファサード写真をめぐる語りを通して、多元的なまちなみの読み方を見出すとともに、まちなみが有する公共性について論考した。

キーワード: まちなみ, 公共性, サテライトラボ, 郡上八幡

1. サテライト研究室開設

縁に導かれて、2022年4月から郡上八幡新栄町の町屋を一軒借りている。saoco lab. と名づけ、研究室のサテライトとした。8月末の本稿執筆時点で、saoco lab. としてオープンしてから4ヶ月間、そこに実際に私が居たのは23日間。その間に体験し、思ったことを書き留めておきたい。固有名詞としての郡上八幡というまちでの時間と、そこにいるものの一人として、まちとはなんだろう、という問いへのつぶやきとして^{註1)}。

(1) 経緯

ごく簡単に経緯を述べる。1992年に名古屋大学へ赴任して名古屋に暮らすようになってから、遊びに、あるいは踊りに行く先として郡上八幡を訪問したその日付は書き留めていない。いいまちだな、ということで1996年6月に前任校の日本福祉大学の学生をつれて八幡に行き、知人が紹介してくれた八幡町役場職員武藤隆晴さんに案内いただいた。これが以降の縁につながる。

その翌年、まちの中心ともいえる新橋の架け替えの相談相手として武藤さんからお声がかかり、具体的なプロジェクトに参加するという関係が生まれた。25年前のことである。それ以降、市街地景観調査・景観マニュアル(1999)、街なみ環境整備事業ワークショップ(1999)、空き家調査と利活用ワークショップ(2001)、水辺空間調査(2005)、都市再生基本計画(2008)、学校橋架け替え(2014)、都市計画マスタープラン(2015)、郡上八幡市街地交通対策(2019)などによって行政と関わり、早稲田大学の授業科目のフィールド(2008)とし、NPO郡上八幡水の学校(2013)を立ち上げた。1999年から2021年度に学生の

卒論修論として日本福祉大学で6本、早稲田大学で17本が八幡を研究対象地とした。この間終始一貫して武藤さんがパートナーの中心であった。

こうした訪問して何かをする関係性のなかで、卒業生の猪股誠野君が2017年度から武藤さん率いるチームまちやに就職し、まちやのリノベーションの仕事^{註2)}をするとともに、住民としてまちづくりに八面六臂の活躍をしていた。その彼から2022年1月30日に連絡があり、3月末で八幡を離れることにしたが、今住んでいる町屋のロケーションや間取りを鑑みると研究室で使うようなことはできないだろうか、という提案があった。二つ返事で了解し、大家さんへの打診や説明などをへて、常時居住するわけではない使い方という家主としては不安のある形での利用を認めていただき、4月から正式に借りることとなった。

(2) saoco lab. の物語

場所は、城下町郡上八幡の通称南町のメインストリートが駅方面へ伸びた先、城下の外周からは外れた、その名も新栄町というエリアの最も中心よりにある(図-1)。武藤洞と呼ばれる小さな川に面した角地であり、道路幅員もここを境に狭くなり、さあここから町の中心に入っていくよと一息つく、絶妙な位置だ。建物は間口3間奥行き9間ほどの2階建の町屋であり、かつての通り土間が水回りに改修され、住居機能がアップデートされている(図-2)。キッチン以外は全て畳敷きで、寝泊まり含め使い方のフレキシビリティは高い。建設年代ははっきりしないが戦後と思われる。

お借りすることが決まってからこの場所を親しいまちの人に文字通りロケーションによって説明すると、



図-1 サテライト研究室 saoco lab. 位置図

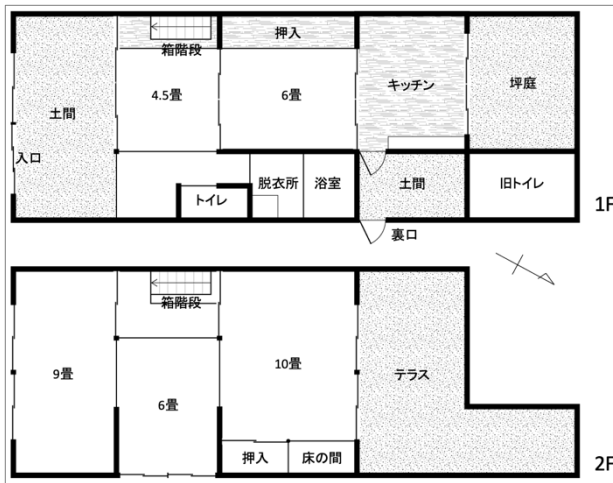


図-2 サテライト研究室 saoco lab. 間取図



図-3 2022年5月オープンラボフライヤー



図-4 土間の展示スペース

「ああ、'さおこう'やね」という返事が返ってくる。そこから、実はこの家が、郡上竿作りの名人安田幸太郎さんの家であったことを知る。2022年3月18日に大家さんに初めてお会いして、使い方のことなどをご相談したときには、この話は全く出てこなかったのである。4月15日に新栄町の家で再び大家さんとお会いした際に、祖父である安田幸太郎さんのこと、竿は作ってはいなかったが修理などをしていたお父さんのことを、「ここでこんなふうに」と記憶をたどりながら語っていただいた。大家さんの手元には幸太郎さんの竿は一本もなく、「まちなかどこそこにあるという話を聞いたことがある」という程度で、古い新聞記事が家にあったようだを探してくださることになった。

一方私が定宿にしている民宿菊美屋さんのご主人は釣りの名人で、玄関には綺麗な竿が飾ってある。4月16日に菊美屋さんに安田さんの家を借りることになったと話したら、なんとその玄関に飾られている竿が幸太郎さん作のものであると明かされる。ひとしきり竿のお話を聞き、「安幸」の焼印があることも教えていただく。

そしてその日、まちなかの蕎麦屋泉屋で学生と昼食を食べていると、そういえば「大家さんが泉屋さんに竿があるかもしれないと言ってませんでしたか?」と思い出し、ご主人に聞いてみる。「私は知らないけど死んだ親父が持っていたかも」、「もしかするとあれかな」と、小上がりの長押にかけてあった竿を取り出して見せていただく。埃を被ったその竿には、菊美屋さんにあった竿と同じ焼印があった。感動する我々の様子を見て、「その竿もっていきなはれ。先生のところにあるほうがええで」と頂戴することになった。信じられない出来事の連鎖であった。いただいた竿をもって店の外に出ると、春の陽に照らされた漆塗りの竿は燦然と輝いていた。4月17日に菊美屋さんにこの顛末を報告すると、さらに、その刻印は釣りの名人でもある安田幸太郎さん自身が使っていた竿にのみ記されていることを聞く。何十年かの時をへて、この家の主人が作り、愛用していた竿が戻ってきたわけである。竿をつくっていたこと、その眺めを記憶するまちなかの人たちが「さおこう」と呼んでいた新栄町の家。サテライトの名称は迷いなく決まった。

(3) まちへのお披露目

5月の連休にsaoco lab.をお披露目することとした。そのためのフライヤーを図-3に示す。土間が良い展示空間になる。戻ってきた竿と大家さんからいただいた安田幸太郎さんを紹介する新聞記事。これまでの卒論修論。そして1999年、2010年、2020年の3時点に研究室で撮影したまちなかの建物約600件のファサードの写真を使って作成した、3時点まちなみ絵巻^{注2)}。まずは地元に敬意を

表して新栄町と栄町の絵巻を展示した(図-4)。アルバムには一軒ごとに3時点の写真を並べたシートをファイルした(図-5)。20年の変化を細かく見られるよう、またご自身の家のシートを差し上げられるように、4.5mほどの長さになる絵巻、間違い探しのような一軒ごとの変化、実に単純な視覚媒体は、さまざまな想起を見る人にもたらした。

そして郡上竿をめぐるお話し会。先述の菊美屋さんのご主人、大家さん、地元で川遊びに長けた尾藤純さんをお招きして、郡上の文化である鮎釣り、天魚釣り、その道具である竿についてお話しいただいた。これに合わせて尾藤さんが町内の釣り好きの人の家に保管されている安田幸太郎さんの竿を集めていただき、その美しさに改めて感じ入る時間となった。また高校生が大学の話を聞きにやってきた。2020年度の卒論のために長期滞在していた学生の知り合いが集まって卒論の話を聞いた。ご近所、知り合いからの多くの差し入れをいただき、地元ケーブルテレビの取材を受け、賑やかなうちにオープンラボは終了した。

(4) 拠点があるということ

タイミングというのは予期できないものだ。saoco lab. を開設することになった2022年度から3ヶ年で八幡市街地を対象とした過疎地域持続的発展計画を作成する仕事が始まった。この半世紀近く確実に先駆的まちづくりを進めてきたものの、中心市街地の人口減少率が法に定める基準を上回ったためである。郡上市からそれを受託したのは(一社)郡上八幡まちづくり会議であり、実質的に動くのは武藤隆晴さんである。この決して軽くない業務を私と研究室が参加して運営することになった。サテライトの話が始まったときには全く知らず、その後武藤さんから実は、と聞いたのである。業務のひとつであるまちづくりの担い手を育成することを目指した「あすの郡上八幡をみつけるゼミ」の運営においては、幹事として佐々木が進行しているが、サテライトラボを開設しているという点で、毎回東京からくる人ではなく、半分町の人と受け止められる。

saoco lab. にふらりと立ち寄るさまざまな人がいるが、その中には、別の分野で長らく郡上を研究フィールドとしているという研究者がいた。あるいは知り合いの研究者から、八幡にサテライト開いたというから訪ねていってよいか、今度の研究会でメンバーを連れて行ってよいか、という声がかかる。常駐ではないものの、拠点があることによって新たなネットワークが生まれる。

またsaoco lab. の開設はローカルにはニュースバリューがあった。地元ケーブルテレビのINGは「はちまん見聞録」という番組枠で6分程度のニュースとして放映し、

郡上市の広報では「郡上の地域資源を生かし、地域の課題を解決する新しいプロジェクトが始まっています！」という連載コラムの8月号に寄稿、掲載され⁷⁾、取材をうけた中日新聞には8月21日付中濃版に記事が掲載された⁸⁾。

2. まちにひらいていると

以上で、saoco lab. のアウトラインが伝わったろうか。ここからは、この走りながら考え、場所を整え、そこにいる時間を過ごしてきた私が体験し、そこから思いめぐらせていることについて話していきたい。

(1) 空間の絶妙さ

まちにひらく場所にしようと考えている。とはいえ観光客を呼び込むつもりはない。まちのひとに対してひらく。そのために先述したように、このロケーションは絶妙である。メインストリート沿いで川沿いで川の向かいには八幡薬局という目印があり、とてもわかりやすい。観光客も多いまちの中心からは離れている。よそものが訪ねるまちではなく暮らすまちが始まるあたりにある。あるテリトリーの境界、つまりつなぎ目に位置している。武藤洞という山から流れ出る小河川にそって降りてくる風が実にきもちよい。冬は寒いかもしれないが、家の前に椅子をだして、川と水路の二つの水音を聞きながら夕涼みをするには実によい。家にいる側の人間が通り側にはみ出していきやすい場所である。道を挟んで向かいには町の案内サインとその前のごく小さな広場的スペースがあり、そこはごみ収集場所にもなる。よって朝、ゴミを出しに来た人たちの目にsaoco lab. は留まりやすく、あいさつもできる。ここを境に道幅が狭まるので、車は速度を落としたり、一旦止まったりする。発進の際の騒音にもなるが、車中からでも街区の途中の一軒より確実に目につく。以上がロケーションの絶妙さである。

ついで町屋の建築空間として。竿作りをしていた時代は、通り土間の一部は吹き抜けになっていた。そこを塞いで2階に一間増やした。さらに土間の一部を水まわりに改築したが、間口一杯の3間奥行き1.5間は土間のまま残された。この広い土間がまちにひらくには実によく機能している。入口の開口部は1999年の写真では通りに面した2.5間が掃き出しのガラス引き戸であったが、その後の改修で、両側に壁、1間幅のガラス格子の3枚引き戸、1間幅のすりガラス腰高窓となった(図-5)。この開口は通りと室内の関係を開きすぎず閉じすぎない。さらに多段階に開き具合調整することができる(図-6)。伝統的な町屋のつくりはほぼ全面引き戸が基本的で、それを住宅に改築する際には一気に開口部を減らし、扉もド



図-5 saoco lab. の建物の3時点アルバム



図-6 通り側の様子と開口部



図-7 室内側から土間方向の様子

アになりがちである。saoco lab. は扉が引き戸であったことは幸いだ。一方1999年当時のままであると、ちょっと覗く、という関係性が取りづらい。引き戸を開けていてもあえて窓から中を覗く人が多い。それは、自身はあくまで通りにいてそこから中を覗いている感覚になるためであろう。引き戸では自身の全身が晒される。軒下に立ち、窓枠に肘をついて話をするのは、自然な振る舞いとして度々観察される。

土間に入ってきた人は、その奥につながる畳の部屋から坪庭までを見通すことができる(図-4)。畳の床の高さは水まわりにつながる板廊下の床から一段上がっており、腰掛けるのにちょうど良い(図-7)。窓と引き戸のガラスはすりガラスであるため、直接視線は通らない、つまりそれを遮るためのカーテンなどは不要であり、夜には通りに柔らかい光を落とすことができる。もちろん軒は大切で、垂木の並ぶ軒裏には在室の目印にしている赤い防火バケツをぶら下げることができる。こうした多段階の中間領域の構成を選択できる町屋の形は、まちにひらく空間条件として極めて効果的である。

(2) たちよる人たちの語り

5月のオープンラボ、7月末のNPO郡上八幡水の学校の夏のオープンキャンパス、8月のお盆休みをコア日程としたオープンラボ、これらの合間の仕事のための滞在。積極的に開いている時も、そうでない時も、さまざまな人たちがたちよる。なにかと気遣って差し入れなど持ってきてくれる人。まちなかのカフェで紹介されたというまちの外の人。ご近所に配ったフライヤーをみて覗きに来た人。学生と話すことが楽しいといって声をかけてくれる人。昔からの知り合い。通りすがりの人。長居する人。すぐ帰る人。

こうしたさまざまな人と交わす言葉、彼ら彼女らが呟いていく言葉。これらをどのように受け止めていけばよいのか。分類軸が定まらないまま、いくつかあげてみよう。

a) まちに関するデータとして

まず、3時点まちなみ絵巻を見ながらの話は、まちの履歴、できごとについて多くの情報源となる。写真だけからは判別できない、あるいはそれ以前について、ここは何屋さんだった、どういう生業、どういう人が使っていた、といった情報が語られる。それは記憶された情報である場合と、語り手自身の体験、思い出、回想である場合がある。もちろん両者は判然としないこともある。これらの語りを聞くことによって、ファサードの向こう側、町屋のなかでの出来事やそれに関わる主体の情報を含めて、このまちはこんな風だったのだ、という理解を深めることができる。また研究的には、言及頻度の高い

建物や出来事の抽出、語りのテキストのコーディングなどによって、まちのイメージ分析につなげることもできるだろう。

またテーマを設定したお話し会として5月に郡上竿、8月に川遊びについて、これまで2回開催している。ここでもまちなみ絵巻を見てのつづやき以上に、まちについての多面的な情報が提供される。継続的に開催することで、アーカイブや分析へと活用する可能性は高い。

あるいはまた、来訪者のつながりをソーシャルネットワーク分析にかけることで、コミュニティの構造に対する新たな発見が得られるかもしれない。

b) まちにくらす人のライフストーリーとして

語る人によっては、このまちで過ごしてきた自身の人生を振り返っているように思われることがある。生まれ育って、嫁いできて、仕事でやってきて、とそれぞれの人生の時間がまちなみ絵巻として可視化されたまちなみ、およびその中の一軒一軒とともにある。そうした感覚がふと湧いてくるのだろうか。嫁いできた高齢の女性から、思わず我が半生が語られてしまったこともあった。あらためて時間をとって語ってもらう機会を重ねていけば、たとえそれが「断片的な」ものであっても、「郡上八幡の生活史」といった分厚い本になるだろうか。さらに思うのは、語られた郡上八幡のまちが伝えること、つまり聞き手、読み手がまちに触れることとは離れて、語り手にとって自ら語るの意味とはなんであろう。なぜ彼ら彼女らは、ヒアリング調査の依頼をしたわけでもないなかで、自ら語り始めるのだろうか。そのこと自体に意味があるとするならば、saoco lab.はそのきっかけの場としての意味を持つことになる。

c) まちに対する要望や期待として

saoco lab. という場で何をするのが明示されていないためか、自由な期待が語られる場面もあった。漠然とまちに大学生がいるのは嬉しい、という期待の声は実に多く聞かれたが、それとは対極的に、まちのなかに居場所を見出せない人たち、高齢の独り住まいの男性や不登校の子どもたちの居場所になるとよいのだが、というすでに自身が課題と考えていることを重ねる声もあった。卒修論の紹介など研究成果をまちの魅力の発進がつかるといふ期待もあった。また都会にいながら地方と関わりを持ちたいという人たちが数名、ふらりと訪れている。ニーズを探り、それをどこかに届けるといふよりも、ダイレクトにsaoco lab. が「できたらいいな」を直接実現する場になることはあり得るのだろうか。

d) 大学・大学生との接点として

サテライト研究室ができることは、近くに大学がないまちにとってさまざまな可能性が期待できると、開設決定以前に市職員でもある友人が話していた。それもあ

ってオープンラボでは、「大学生と話そう」という呼びかけをしてきた。しかし今のところその文脈での来訪は通信制高校に通う生徒一人のみで、子どもたちが興味を示したり、夏休みの宿題の相談にやってくることはなかった。もう少し様子を見たい。

e) アジールとして

これについては一回限りの、しかし極めて印象的な訪問からの想像であり、勘違いかもしれない。夜もかなり更けたころ、開け放した戸の向こうに突然姿を見せたのは、会話をするほど親しくはないが顔見知りのまちで飲食店を営む人だった。簡単なあいさつのもと、暗い道にまっすぐ視線を投げたまま、自身の店の今後についての不安や迷いを語り始めた。聞き手となった私とその横顔に時々挟む問いや言葉に答えつつ、自らの言葉を確かめているような会話。通りに漏れていた光をみてふと自転車をとめて、そのつもりもなかったのだが、まちの中の濃厚な人間関係のすこし外にいる人に対して、思わず話してしまった。そんなふうに思えた時間だった。ここはある種のアジールなのかもしれない。コミュニティカフェやUDC、あるいはまちの保健室とは違う場なのか。

3. まちなみという公共性

カレンダーや記録ノートを見返しながら、saoco lab. で出会った場面をひとまず上記のように書き留めたところで、あらためて、まちにひらくという観点から考えてみたい。ひとまず結論的にいうならば、「まちにはまちなみという公共性が必要である」ということだ。

(1) まちなみ絵巻の読み方

3時点まちなみ絵巻(図-8)を展示し、それを眺めてのさまざまな語りに触れ、自身でも繁々と眺めながら、この絵巻の読み方には、タテ、ヨコ、ナナメ、オク、の4方向への眺め方があると気づいた。

タテは一軒一軒の20年間の変化であり、まちづくり的には、その先に保存や継承というキーワードがある。ヨコは各時点、通りにおけるまちなみの連続性やバランスといった狭義の景観まちづくりとして文字通りのまちなみの整序や規準形成につながる。この2方向の読み方はなじみのあるものだ。

これに対してナナメは、まちの人たちの語りによって気付かされた。saoco lab. の隣の豆腐屋だったお宅の1999年の玄関戸が2010年にはその隣の家の玄関戸になっている、と教えられた。それは豆腐屋でもあったが大工でもあった主が自身と隣の家の改修の際に建具を再利用したためである、と。建物のパーツが斜めにつながって



図-8 3時点まちなみ絵巻 新栄町北面（部分）

いる。あるいはまたある時点でここにあった店が次の時点でここに移動した、と。つまりまちなみで、もの、ひと、営みが軌跡をたどれる形でつながっている。本家と分家というつながりもその延長線として理解できる。これがナナメの読み方である。

最後のオクは、ファサードからは読み取れない建物内部方向の情報が語りによって随所に付与されていき、それによって生業に関わる地域外とのつながり、写真にうつりこまない行為が平面のまちなみ絵巻に次元を加算する。たとえばここはむかし旅館で主たる利用客は富山の菓売り、鯉節の行商だった。このぼた餅は有名でまちなかに住んでいない人がどこかに行くときのお土産用買いにきていた。都市をめぐる物流、経済圏のつながりがまちなみに重なる。

3時点まちなみ絵巻という原始的でアナログな視覚媒体をきっかけに想起されたまちの人たちの語りは、さまざまな多次元のパースペクティブとアスペクトとして、まちなみが共通世界であることを教えてくれた。通りに面していることで誰でもが眺めることができるというまちなみの公開性が、それぞれの体験や興味知識に基づいた多元的なパースペクティブ、見方となる。語る人たちは自身の建物だけでなく、他の店、住まいについても分け隔てなくかたる。むしろそもそも他者の視線が注がれ、他者の行為がそこで生起する場所としてまちを構成する建物は存在した。桶屋、駄菓子屋、八百屋など、ミセの間を通りに面して有する町屋の空間構造は機能的必然から公開性を有し、店をやめて住まいになっていくにつれて公開性は弱くなったものの、基本構造が継承され、現役の記憶を重ねられるまなざしがある。saoco lab.の土間に足を踏み入れた人の何人かは竿がならんでいる様子を自身の目で見ており、気難しい職人だった幸太郎さんに怒られた経験があるのである。まちなみはその物理的な空間の状態と人々の語りと行為の多次元なパースペクティブによってリアリティを伴って現れ、まちの人たちの間にある共通の世界となっている。

そう、お気づきであろう。ハンナ・アレント⁹⁾のいう公共性の二つの次元をまちなみは備えている、という解釈である^{注3)}。

(2) まちによって私を語る

そのまちなみについて、訪れたひとりひとりの語りは、これが八幡らしい伝統的な町屋である、というような表象としての、説明的な言説ではなく、「このオガワヤが私の初めてのお使いだった」というように「オガワヤに初めてのお使いにいった私」を他者である私に語る。その人はケーブルテレビの取材者として私の前に現れたのだったが、この語りの瞬間に彼女は肩書きを離れてこのまちで元気に育った「私」になった。自らの半生を語った高齢の女性も、「嫁いでこの家に住むようになって、その時の家の間には水路があって」とまちなみの様子を語るのだが、それは、そうしたまちなみを見ながらずっとここで暮らしてきた私は誰であるかを語っている。ご本人はそのような自覚がないままの語りであったかもしれないが、

以前にも、こうしたふと口をついて出た語りにその人の個別具体的な生を直覚したことがある。2018年に実施した八幡の商店街の個々の店舗に対する想起のアンケート調査¹¹⁾¹²⁾において、まちなかの化粧品店に対して「昔はここで化粧品を買った」という高齢の女性の回答があった。届けられたアンケート用紙を開き、地図を見ながら順番に店をたどり、化粧品店の名前を見た時に、ふっと浮かんだ想起であろう。それを書き留めたとき、「もう、いまは化粧品など買わなくなった」という自分を見出したのではないか。私の勝手な想像である。しかしエクセルにまとめられたデータを眺めていた時、このセルの向こうに、このまちで生きてきた名前は知らない一人の女性の一度かぎりの個体の生をありありと感じたのである。

こうした一人ひとりの代替不可能な生がまちに交錯している。その状態が、タテ、ヨコ、ナナメ、オクに読み解かれるものとしてのまちなみという共通世界となり、

そこに公共性がやどっている。郡上八幡には伝統的建造物群保存地区に指定されたまちなみがある。新栄町はそのようなヨコとタテにわかりやすく共有しやすい特徴はない。しかし、あるいはだからなのか、まちのひとたちの語りはリアルで、ナナメもオクもある。情報として確かでないこと、思い違いも含まれているかもしれない。ことの真偽ではなく、今、その人に頭の中に浮かんだ記憶のなかの行為が外に向かって語られ、私や学生や居合わせたまちの人に聞かれた。そのことによってまちなみが共通の関心の対象、世界になった、のだと思う。

(3) ひらいた場に現れる私

最後に、前章でアジールなのか、として紹介した飲食店の主人の語りについて再度考えよう。その晩の彼の語りを聞く直前までは、彼は店舗Mのマスターであった。カウンターの向こうでリズムカルに動く姿は、私の目には、職業人の表象として映っていた。しかしその晩の彼の語りは、基本的にはその職業をめぐる話ではあったが、唯一無二なその人として現れさせ、その現場に立ち会う私の目を釘付けにしたのである。他ならぬ彼は、私の想像の及ばない生を生きていて、私はそれに強く関心をもった。依然として彼の氏名は知らないが、こうした現れの空間が、saoco lab.の戸口に出現したのである。私にとって他者である彼が現れたと同時に、彼にとって他者である私が現れた（から立ちよった）。互いに公開された空間としてsaoco lab.の戸口があった。

先述したように、それはsaoco lab.の物理的な空間特性による、少なくともそれがなければ引き起こされなかったであろう。彼が現れるという公共性は、まちなみという共通世界の一要素としての建物、そしてそれがまちにひらいた物理的空間であったことによってあり得た。公共性は抽象的な概念としてではなく、具体的な場所において成立し、その空間のデザインがそれを左右するのである。

(4) まちにまちなみが必要な理由

まちなみとは、都市の景観そのものな眺めであるが、それ以上のなにかでもあるが故に、形態の整序の対象として捉えることにずっと違和感を感じていた。まちなみとは何かはずっとよくわかっていなかった。今回、あまり深く考えずに3時点まちなみ絵巻と個々の建物の3時点アルバムを作った。それがきっかけとなって寄せられたまちの人たちの語り。一つ一つのエピソードに感心する日々を重ねながら、まちなみというものが持っている力、ポテンシャルを考えていた。

物理的にはその時々ある一つの形をとって存在している建物が、並び、変化しつつ存在している。そこで

人々が生きている。それがまちである。そのまちと永きにわたり、あるいはまだ少しだけの期間生きている一人ひとりが、それぞれ自由に選択した建物の空間において体験してきたことどもを、視線も思考もさまざまなベクトルとして語る空間、それがまちなみなのではないか。齋藤の手解きで近づいたアレントの公共性をめぐる論によって、同質にまとめられない自由で主体的に生きられた生の舞台であり、その生を外から見つめている他者としてのまちなみ。あなたはこのまちでちゃんと生きてきましたね、という証人のような存在としてのまちなみ。そのまちなみは私たちの手によって作られてきたという実感。誰でもが見ることができるまちなみがあり、それが人々のそれぞれのベクトルからの関心の対象になっている。そういうまちなみがここにはある。それがここをまちにしている。そのように、ひとまず新栄町で感じたことを考えてみた。まちは、まちなみによって、まちになる。だから、まちには、まちなみが必要だ。

4. saoco lab.でのこれから

7ヶ月前には思いもよらなかったサテライト研究室は、縁としか呼びようのない繋がりが具体化したものだった。そこに身を置きながら、長い付き合いのあるこのまちのことを改めて考える機会を得た。saoco lab.での活動を研究や論文にしてこそサテライト研究室なのだろう。それは学生諸君の活躍に期待するとして、私はしばらく現在進行中の過疎地域八幡のみらいを考える取り組みに傾注しよう。移住者も増え、新しい素敵な店もふえてはいるが、町衆としてまちを支える力は確実に弱まっている。人口減少はダイレクトにそこに効いている。その現実を前にしての計画づくりを悩むなかで、武藤さんは「八幡のまちが、これからもまちでありつづけるために」というキーフレーズをたびたび発する。何を継承していけば八幡というまちでありつづけられるのか。

先にひとまずまとめたように、まちにはまちなみが必要だとするならば、どのようなまちなみを、どのように存続させていけばよいのか。「物理的な空間の状態と人々の語りと行為の多次元なパースペクティブによってリアリティを伴って現れ、まちのひとたちの間にある共通の世界としてのまちなみ」の継承。最終的な基準や施策はタテとヨコに対してのコードとして書かれるかもしれないが、そこにはナナメとオクが内包されていなければならない。そんなまちなみづくりとは、いったいどんなことになるのか。壊され、建て替えられていく建物によって、共通世界には大きな穴があく。そこに新しい始

まりを導き入れるための広義のデザインとは、どのようなものなのか。

さらには、このようなまちなみを成立させる一人ひとりの語り。語るという行為それ自体を支えるための資源となる、自由時間や言語。そもそも関心。まちづくりを一番下で支える資源の涵養はどのようにすればいいのだろう。すでに進行し、法が加速させているように、建物の関心事は、公共性よりも、室内の適温と静寂という快適さ、耐震耐火、脱炭素といったヒトとチキウの生命に向かっている。こうした規準値で語るができるものに支えられた一義的な生命、機能が社会的に重視されると、公共性としてのまちなみは一気に生気を失っていく。遠回りのようではあるが、こうした関心の矛先への意識化をふくめて、まちを語るという行為を下支えする道の模索も必要と思う。しかしそれを語る言語は、聞き手に届く言葉は、そう易々と見つからない。子どもたちが saoco lab. にふらりとやってこない理由も、この辺りから考えてみたい。

いずれにしても、まちにできるかぎりいること、まちにひらくこと。そこに排除のない自由な空間を保つこと。もうすこし親密な空間となる工夫をすること。それを心がけながら、まずこの1年過ごしていこう。

興味ご関心をお持ちいただいた皆様、saoco lab. でお話ししましょう。滞在予定などはインスタグラム saocolab で検索ください。

補注

注1)大学のサテライト研究室の意義や成果、そこでの活動実践の紹介や分析例がある¹⁾⁴⁾。その多くは、大学組織の研究教育活動という位置づけを有し、本校と比較的近い場所に立地している。それに対して saoco lab. は、佐々木個人の活動であり、位置付けも資金も大学とは一切関係がなく、かつ遠隔地にある。こうした設置経緯と実情の固有性も踏まえて、本稿では当事者個人としての現時点での備忘録的論考としたい。滞在した学生が感じていること、学生にとっての意義を考えることも責務ではあるが、それはまた後日としたい。

注2)なおこの写真データをもとにしたファサード変化分析の一端を文献6)としてまとめている。

注3)公共圏、公共圏的空間、あるいは親密圏といった概念は、まちづくりの議論において主体のつながりおよび物理的な空間領域の双方において、あるいは両者の関係性において、重要視されている^{注4)}。その議論においてはアレントおよびハーバーマスの論考が基礎とされる。しかしながら佐々木はこれらをまったく読みこなせていない。そこでこれらを踏まえた齋藤の公共性についての論¹⁰⁾をここでは参考として、そこから佐々木の関心事である具体の場所の体験の

理解として解釈をおこなった。逐次箇所の対応をすることは省略しているが文献10)の主に「II公共性の再定義 第2章複数性と公共性」から用語と概念を借用している。

注4)文献13)では、佐々木も参画している開田高原と宮田村の事例をもとに藤倉が地域の持続可能性をめぐっての試論を提示している。ここにおいても「公共圏的空間」という空間把握と「地域の物語」という仮説が公共政策の文脈にひきよせて提示されている。

参考文献

- 1) 出村嘉史：中心市街地活性化とまちなかのDIY-美殿町ラボづくりの成果、景観・デザイン研究講演集、No.12、2016、pp.451-454
- 2) 松田楓、星野裕司、円山琢也：「ましきラボ」における復興まちづくりの実践、景観・デザイン研究講演集、No.13、2017、pp.25-31
- 3) 鶴心治、中園真人、小林剛士：地方大学のまちなか研究室によるまちづくり活動と運営に関する一考察（都市計画）、日本建築学会技術報告集、Vo.12、No.23、2006、pp.395-398
- 4) 両角光男：熊本大学工学まちなか工房における実践的都市計画教育・研究の取り組み、工学教育、Vol.55、No.3、2007、pp.3-38-42
- 5) 猪股誠野、武藤隆晴：郡上八幡における先進的空き家対策の取り組みとその課題、景観・デザイン研究講演集、No.13、2017、pp.451-454
- 6) 家田雅之、佐々木葉、舛場星澄：郡上八幡における町並みを構成するファサードの特徴と変化、景観・デザイン研究講演集、No.17、2021、pp.324-329
- 7) 郡上市：郡上八幡に大学研究室の分室 saoco lab. をオープン、広報郡上、令和4年8月号、p.17
https://www.city.gujo.gifu.jp/life/docs/222_13.pdf
- 8) 中日新聞：八幡の町屋に早大研究室サテライト、2022年8月21日中濃版およびweb版
<https://www.chunichi.co.jp/amp/article/530474>
- 9) ハンナ・アレント：人間の条件、ちくま学芸文庫、1994
- 10) 齋藤純一：公共性、岩波書店、2000
- 11) 加瀬未奈：郡上八幡の店舗に対する住民認識に関する研究、2018年度早稲田大学卒業研究
- 12) 土田葉：買い物行為を通じた商店街店舗に対する主体の価値意識に関する研究-岐阜県郡上市八幡町を対象として-2019年度早稲田大学修士研究
- 13) 早稲田大学公共政策研究所編、藤倉英世ほか：地域から公共政策を考える、早稲田大学出版部、2022、第9章「地域の物語」とその再生-「持続可能性とは何か」を地域の側から「問い」直す